

【国際井上円了学会設立大会 設立記念講演】

井上円了の哲学について

竹村牧男

Abstract :

As a young man, INOUE Enryō 井上円了 first looked to Confucianism and Christianity in his search for truth. Then, at Tokyo University he studied Western Philosophy with FENOLLOSA and Buddhism with HARA Tanzan 原坦山. He finally found truth in philosophy and Buddhism. In particular it was in Hegel's position of the non-duality of the Relative and the Absolute where he discovered the ultimate truth and realized that the same position existed in the thought of Tendai 天台 and Kegon 華嚴 Buddhism.

Later, when only 29 years old, he founded an educational institution called the "Philosophy Academy" 哲学館. He wanted to increase the intellect of his fellow countrymen and women through philosophical education in order to strengthen the country. Philosophy was for INOUE Enryō the base discipline, which systematizes all other disciplines, it is the science that searches for the principles and laws of all things, that directs the human mind to an all-encompassing ideal and that, above all, is also the basis for the cultivation of virtue.

Later, INOUE Enryō realised that the ultimate position in philosophy is to be assiduously active in the real world. He strongly advocated activism and proclaimed: "Activity is heaven's principle, courage its will, struggle its commandment." Further, he held that there has to be an Upward Gate and a Downward Gate in philosophy. After finding truth, truth must then be applied in the real world. He taught that working assiduously

for the happiness of the people and the betterment of the society, is the essence of philosophy. For INOUE Enryō the Downward Gate is the aim of philosophy and the Upward Gate is its means. I think this point is a topic worthy of our reflection.

井上円了は少年時代、真理を求めて儒教、キリスト教に学び、さらに東京大学でフェノロサに西洋哲学を学び、原坦山に仏教を学ぶなどして、ついに哲学と仏教に真理を見出した。特に西洋哲学の中ではヘーゲルの相対と絶対とが不二であるとの立場に究極の真理を見出し、仏教の天台思想や華嚴思想などに同等の立場を見出した。

その後、僅か 29 歳で「私立哲学館」という教育機関を開設し、哲学教育に基づく民衆の知性の開発による国力の強化をめざした。井上円了にとって、哲学は諸学を統括する根本の学問であり、物事の原理・原則を究めるものであり、人々の心を遠大な理想に向かわせる効果のあるものであり、また何よりも徳性を養う基盤となるものでもあった。

井上円了は、その後、哲学の究極は現実世界においてひたすら活動することにあると了解し、もっぱら活動主義を唱えることになる。この結果、「活動は天の理なり、勇進は天の意なり、奮闘は天の命なり」と喝破している。さらに哲学には「向上門」と「向下門」の二門がなければならないとし、真理を究めたらそれを現実世界に応用し、人々の幸福と社会の改善のためにひたすらはたらくことに、哲学の核心があることを説いた。「向下門」こそが哲学の目的であり、「向上門」はその手段であるとも明言しており、その卓越した立場は今日の時代においても深く顧みられるべきものがあると、私は思うのである。

1. 「諸学の基礎は哲学にあり」

井上円了（1858 年–1919 年）は、少年時代、漢学の塾に通って中国古典の教養を身につけ、長岡洋学校に入学してキリスト教を学ぶなどしました。その後、東本願寺を頂点とする宗門内寺院の優秀な子弟として、明治 10 年(1877)9 月、京都東本願寺の教師教校に入学、さらに明治 11 年(1878)、東本願寺留学生として上京し、この年 9 月東京大学予備門に入学したのです。ここで語学などをさらに磨いたものと思います。そうして 3 年後の明治 14 年(1881)9 月、東京大学文学部哲学科に入学、西洋哲学を本格的に学ぶのです。やがて明治 18 年(1885)7 月、同哲学科を卒業し、早くも文筆において活躍し、『哲学一夕話』（第 1 編・明治 19 年(1886)7 月、第 2 編・

明治19年11月、第3編・明治20年(1887)4月)、『哲学要領』(前編・明治19年9月、後編・明治20年4月)その他を著わすなど哲学の真髓を紹介する本を世に送っていきます。さらに『真理金針』(初編・明治19年12月、続篇・明治19年11月、続々編・明治20年11月)、『仏教活論序論』(明治20年2月)の名著は、ベストセラーとなったのでした。

その後、明治20年9月16日、哲学館を創立、麟祥院で開校式を挙行了したのでした。井上円了がその約3ヶ月前に発表した「哲学館開設の旨趣」には、その時代になぜ哲学の学校を開くのかの説明が次のようにあります。

「……しかして諸種の学問中、最もその高等に位するものはすなわちこれ哲学にして、よくこれを研修するにあらずんば、もって高等の知力を発達し、高等の開明に進向するあたわず。これまた当然の理なりとす。哲学の必要たる、ここにおいてか知るべきなり。それ哲学は百般事物につきて、その原理を探りその原則を定むるの学問にして、上は政治法律より下はもって百科の理学工芸におよび、みなその原理原則を斯学に資取せざるはなし。すなわち、哲学は学問世界の中央政府にして万学を統轄するの学と称するも、決して過褒の言にあらざるなり。……」(「哲学館開設の旨趣」、明治20年6月)

すなわち、人々の知力を開発するには、学問によらなければならない、その際、高等の学問によれば、高等の知性を開発することができる。高等の学問はあらゆる学問の原理原則を探求する哲学にほかならない。「哲学は学問世界の中央政府にして万学を統轄するの学」である。ゆえに哲学の教授が必要なのだということです。ここに、井上円了の哲学に対する基本的な見方があるでしょう。

東洋大学は建学の理念の筆頭に、「諸学の基礎は哲学にあり」を掲げています。よくこの言葉は実は井上円了の言葉ではないと言われます。しかし、円了の著作の中、もっとも初期のものである『哲学一夕話』第一編の「序」に、

「略してこれをいえば、純正哲学は哲学中の純理の学問にして、真理の原則、諸学の基礎を論究する学問というべし。」(『井上円了選集』第1巻、34頁)

とある箇所、その典拠を見出すことができると思います。その意味では、この言

葉も円了の意を表したものといって差し支えないものです。ただし、確かにその後、この「諸学の基礎」という言葉は使わなくなり、今もありましたように、哲学は「万学を統轄する学」「学問世界の中央政府」等というほか、あるいは「諸学の王」「統合の学問」等と述べています（『純正哲学講義』（明治24年(1893)）、『井上円了選集』第1巻、254頁など）。しかしながら、これらの表現も、哲学が「諸学の基礎」であることを、別様の表現で述べたものと見てよいでしょう。

この「諸学の基礎は哲学にあり」ということは、哲学こそがあらゆる学問の意味づけを行うということの意味するものと考えられます。その意味を比較的是っきり説明しているものに、次の文があります。

「……純正哲学において論定せるものは、倫理、論理、その他の諸哲学の原理原則となり、哲学諸科の論定せるものは、理学、法学、その他の諸学科の原理原則となりて、学問世界の中央政府はすなわち哲学なり。……そもそもわが国の文明を進むるは、政治、法律のひとりよくするところにあらず、理学、工芸のひとりよくするところにあらず、その諸学の政府となり、その諸芸の根拠となりて、よくこれを統轄し、よくこれをしてその区域を保ち、その位置に安んぜしむるの学を講究するを要するなり。……これよりしてのち世人をして、哲学は学問世界の中央政府にして、諸学諸芸の根拠なるゆえん、ならびにこれを講究するの必要と、そのよく文明を進め国益を助くるゆえんを知らしむべしと信ず。」（「哲学の必要を論じて本会の沿革に及ぶ」、『哲学会雑誌』、明治20(1887)年2月・3月。なお、『純正哲学講義』の末尾に引用される『哲学会雑誌』の論文も参照のこと。『井上円了選集』第1巻、256-257頁）

すなわち、哲学は、「諸学の区域を保ち、その位置に安んぜしむる」ものだということです。しかもこれがあればこそ、他の学問の意義も十全となり、ひいては我が国の「文明を進め国益を助ける」ことにもなるといいます。したがって、「諸学の基礎は哲学にあり」を掲げる本学は、それぞれの学問の成立する根拠を十分自覚する作業も行うと同時に、それらの学問がどのような体系を組織することになるのか、原理の原理を追究する哲学の営みを振興することによって、教育・研究活動のそれぞれの意味を根源的に問い、そのことを通して未来の理想的な地球社会を先導していく立場を切り拓いていくという、重要な使命を担っていると言えるでしょう。

2. 井上円了の哲学 I カントからヘーゲルへ

さて、井上円了はこの重要な哲学という学問を東京大学にて学んで、自分自身はどのような思想・哲学を持つに至ったのでしょうか。

円了は東京大学文学部哲学科において、かのフェノロサからカント、ヘーゲルやスペンサー等々の西洋哲学を学び、原坦山からは、『大乘起信論』その他の仏教思想を学びました。この学習・研究のなかで円了はついに哲学に、自分の求める真理があることを見出します。さらにその哲学に見出した真理の立場から仏教を見直したとき、すでに仏教にも同じことが説かれていたと気づいて、心から喜んだといいます。そのことについて、円了は『仏教活論序論』において、次のように語っています。

「すでに哲学界内に真理の明月を発見して、更に顧みて他の旧来の諸教を見るに、ヤソ教の真理にあらざることいよいよ明らかにして、儒教の真理にあらざることまたたやすく証することを得たり。ひとり仏教に至りては、その説、大いに哲理に合するを見る。余、ここにおいて再び仏典を閲し、ますますその説の真なるを知り、手を拍して喝采して曰く、何ぞ知らん、欧州数千年来、実究して得たる所の真理、早くすでに東洋三千年前の太古にありて備わるを。……これ実に明治十八年の事なり。」（『井上円了選集』第3巻、337頁）

明治18年(1885)は、東大哲学科を卒業する年です。この時には、西洋哲学が究明した最高の真理のあり方を会得するとともに、仏教はその真理と同等の真理を語っていると確信していたと言えるでしょう。では、それはどのような内容のものだったのでしょうか。

このことについて円了は、『真理金針』〔続々編〕において、次のようなことを述べています。

「～すなわち絶対は相対を離れて別に存するに非ざるゆえんを知るべし。……つぎに西洋にありては、シェリング氏の哲学は相対の外に絶対を立つるをもって、ヘーゲル氏これを駁して相絶両対不離なるゆえんを証せり。今、仏教に立つるところのものはこの両対不離説にして、ヘーゲル氏の立つるところと少しも異なることなし。」

すなわち仏教にては、相對の万物のその体真如の一理に外ならざるゆえんを論じて、万法是真如といい、真如の一理、物心を離れて存せざるゆえんを論じて、真如是万法といい、あるいはまた、真如と万物と同体不離なるゆえんを論じて、万法是真如・真如是万法、色即是空・空即是色という。」(『井上円了選集』第3巻、304-305頁)

この記述によりますと、どうも西洋哲学においてはヘーゲルを最高と捉え、それと同等の真理を仏教も説いていると見たようであります。

周知のことですが、井上円了は哲学の重要性を世に訴える活動の一環として、4人の代表的な哲学者を選んで祭典を行うということを始めました。その4人とは、古今東西にバランスを考えて選ばれていて、孔子・釈迦・ソクラテス・カントの4人であり、この4人を哲学の四聖と呼んでいます。このように、哲学の四聖の中には、特に西洋近代の代表としてカントが挙げられているわけです。実際、円了はカントを高く評価していました。『哲学早わかり』(明治32年(1899)2月)には、

「カント氏出でてこれ(経験・独断)を統合し、別に批判学を起こして従来の哲学の仮定独断を看破し、一大完全の組織を開きしより以後は、西洋の哲学大いに完備するを得ました。よってカント氏以後、今日に至るまでを近世哲学の完備時代と名付けます。……とにかく古代哲学にありては紀元前400年代に世に出たるソクラテス氏を中興とし、近世哲学にては今日より百年前のカント氏を中興とする故に、余は先年、東西哲学界の四聖を選び、……」(『井上円了選集』第2巻、48-49頁)

と述べています。また、『哲界一瞥』(大正2年(1913)6月)は、哲学堂について解説したのですが、そこでカント(韓哲)について、「近世無二の碩学大家であるカント氏は云々」とあり、さらに「その人格性行共に学者の模標として、一点の間然するところなしというてよい。また近世の哲学はフランスのデカルト氏に始まりて、カント氏これを大成せりと申しても差し支えない」とも述べています(『井上円了選集』第2巻、76-77頁)。

しかしどうも実際は、その哲学の内容において、ヘーゲルの方をより高く評価していたようなのです。では、その理由はどこにあったのでしょうか。『哲学要領』〔前編〕(明治19年(1886)9月)によれば、カントの哲学は次のように評されるべきものでした。

「……これを要するに、氏（カント）の学、真理に基づきて研究を施したるはデカルト氏とその起点を同じうするも、客観の現象を空間と時間の二者より成るものとし、これを主観中に帰入してその心体を自覚と名付けたるは、デカルト氏の二元論と大いにその趣を異にするところなり。つぎに氏の感覚論を排して必要普遍の心力あることを論じたるはベーコン氏、ロック氏等に異なるところにして、感覚上の経験をもって原形を満たすところの材料となしたるは、諸氏に同じうするところなり。つぎにカント氏の主観論はその源ライプニッツ氏よりきたるをもって、氏と其の見を同じうするところあるも、カント氏は直覚上物質の実体を知るにあらずというに至りて異同あり。しかして氏の心の外に物質の実在を定め、その実体は全く知るべからざるものとなしたるはその哲学の一大欠点にして、フィヒテ氏のその論を考正して完全の唯心論を起こしたるゆえんなり。」（『井上円了選集』第1巻、141-142頁）

カントは、我々が見たり聞いたりするものはすでに感覚にとりこまれたもの、主観の側のものとして、唯心論に近い立場にあったのですが、その感覚をもたらず物自体が外界に存在するという立場にも立ち、結局、物心二元論に陥っていて、そこに一大欠点があるというのが、円了の判定でした。『哲学早わかり』には、この辺を「……カント氏に至れば、ヒュームの懐疑論を破り、かつ経験独断の両主義を統合して批判哲学を起こし、唯心論より進んで物体実在論を唱え、もって新たに哲学上の大問題を提出するに至り、……」（『井上円了選集』第2巻、51頁）と、簡潔に示しています。

さらに、『奮闘哲学』（大正6年(1917)5月）でも、このことを「新体の歌」によって興味深くうたいあげていますので、紹介しておきたいと思います。

「つぎに出でたる豪傑は、その名も高きカントなり、深くヒュームの虚無論に、心をとどめ疑いを、起こして更に理を究め、きたえ上げたる一刀を、振るいきたりて各国の、間にもつれし哲学の、乱麻を断ちて出でにけり。カント一代の哲学は、独断学派の偏見と、経験学派の浅識を、打ち払いつつその本を、究めて知識の根底を、開き示せる批判学、その霹靂の一声に、白雨天地を洗い去り、たちまち光風霽月を、仰ぐがごとく哲学の、世界は清くなりけり、されどもこれの結論は、万の物の本体を、知識の外に放ち去り、真の不思議に帰せしより、ついに異論を呼び起こし、

フィヒテ出でてその体を、思想の中に収め込み、唯心論の建築を、仕上げたれどもすぐにまた、……」(『井上円了選集』第2巻、245頁)

これに対し、フィヒテは、「その物の実体も意識内に帰して唯心論を完全ならしむ。……」(『哲学要領』〔前編〕、『井上円了選集』第1巻、142頁)とあり、要は、カントの物自体も意識内にとりこんで、唯心論を確立したのだといえます。しかしこのフィヒテの立場は、我を中心としたもので、非我への配慮がなく、その点がシェリングによってさらに超克されることになったといえます。「(シェリング)氏はフィヒテ氏の我をもって絶対となしたるに反対してこれを相対に属し、絶対の原体は我と非我の相対境を離れてその上に位するものとなせり。そもそもこの絶対の原体は、彼我両境の相合して一体となりし点にして両境の本源なり。その本源自体に有するところの力をもって、次第に開発して彼我両境すなわち物心両界を生じ、各界また開きて万象を生ずるなり、これを進化という。この絶対の進化を論ずるものこれをシェリング氏の哲学とす」(同前、『井上円了選集』第1巻、143-144頁)とあるようです。

ところが、シェリングにおいては、相対とは別に絶対が立てられていて、そのことになお問題が残ったのであり、そこをさらに超えたのがヘーゲルであったということです。

「つぎにヘーゲル氏はシェリング氏の説の端緒を補うて一層の完全を与えたるものなり。シェリング氏の我境を相対となして彼我両境の本源を絶対となしたるは、氏のフィヒテ氏に一步を進めたるころなれども、彼我両境の外に別に絶対の体を設けたるは論理の許さざるところなり。けだし我人の知識は相対より成るをもって相対の範囲を離れては一步も知ることもあらず。故に絶対の体、果たして相対の外にあるときはだれかよくこれを知らんや。これヘーゲル氏のシェリング氏を駁正して一家の哲学を起こしたるゆえんなり。故にヘーゲル氏は相対の外に絶対を立てずして、相対の体すなわち絶対なりとす。他語をもってこれをいえば、氏の説、相対と絶対とは全く相離れたるものにあらずして、互いに相結合して存し、絶対の範囲中に相対のあるゆえんを論定して、相対中にありてよく絶対のいかんを知り得べきものと立つるなり。この絶対の全体を理想と名付け、その体中含有するところの物心両界を開発するもの、これを理想の進化という。……ドイツ哲学ここに至りて始め

て大成すというべし。」(同前、『井上円了選集』第1巻、144-145頁)

注意すべきことは、ここに出る「理想」という言葉です。現代語のいわゆる「あるべきあり方」等のことではなく、実に本体のことにほかなりません。円了はこの理想について、『哲学要領』〔後編〕(明治20年(1887)4月)に、「つぎに理想とは物心の本体に与うるの名称にして、その体、物にもあらず心にもあらず、いわゆる非物非心なりといえども、また物心を離れて別に存するにあらず。物心の体すなわちこれ理想にして、理想の表裏に物心の諸象を具するなり。故に物心は現象にして、理想は実体なり。これをもって二元同体の理を知るべし。けだし二元その体を同じうするは、物心の体同一の理想による。……」(『井上円了選集』第1巻、154頁)とも説明しています。こうして、相対にただちに絶対を見、絶対は全く相対以外の何物でもないという立場に到達したことになります。このヘーゲルの「相絶兩対不二」の思想、「二元同体の理」こそが究極的な立場であると、円了は見たのでした。

3. 井上円了の哲学Ⅱ ヘーゲル哲学と仏教思想

このような哲学の究極の立場に関して、今は思想史的に辿って見ましたが、もう一度、井上円了のさまざまな説明の中にこのことを確認してみましょう。円了の最晩年の著書である『奮闘哲学』には、「哲学和讃」50首なるものが掲載されています。そこには、次のように歌われています。

哲学界の歴史とは、唯物唯心の争いと、一元多元の戦いの、跡をとどむる古戦場。
一元論の火の前に、長き世を経てかたまりし、唯物唯心の争いの、氷もとけて水となる。

物と心の関係は、離れて離れぬ絶妙の、不一不二とぞ定むるは、一元論の極致なる。
この一元の本体は、不可思議中の不可思議なり、心もことばも及ばねば、絶対無限と名づけたり。

宇宙の森羅万象は、その絶対の波にして、時方二系の際なきは、その発したる光輝なり。(『井上円了選集』第2巻、436-437頁)

一般に唯物論は多元論、唯心論は一元論に親しいでしょう。円了によれば、西洋哲学史においては、おおよそ唯物論は唯心論へ、多元論は一元論へと進展したということになります。その一元論の極致として、ここでは物と心の不一不二と示されていますが、物と心が不二であれば、その二つを貫く何ものかがあるはずで、物と心の異なる現象に共通の本性、本体を想定しなければならず、そうするとその本体と物・心との関係も問われてきます。こうして、一元も最終的には、単なる多(物)に対する一(心)ではないことはもちろん、単に物と心の不一不二のみならず、多元(物・心、現象、相対)と一元(本性・本体、実在、絶対)との不一不二であるような世界、つまり相対と絶対が一つでもないし別なのでもないような世界に帰着することにもなります。

そういう一元論の極致の内容について、円了はたとえばもつとも初期の『哲学一夕話』第一編に、わかりやすく次のように説いています。

「おおよそ哲学上論ずるところの問題はこれを帰するに、心のなんたる、物のなんたる、世界のなんたるに外ならず。世界は物のみにして心なしと立つるもの、これを唯物論といい、世界は心の中にありてその外に物なしと立つるもの、是を唯心論という。唯心は心の一方に僻し、唯物は物の一方に僻し、共に中正の論にあらざること明らかなり。もしその中正を立てんと欲せば、物心二者を統合して、非物非心の理を本とせざるべからず。その理の外に物心なしと立つるときはこれを唯理論という。唯理論は理の一方に偏するをもって、これまた中正の論にあらず。その理を離れて別に物心ありとするも、また正論にあらず。故に理は物心を含有し、物心は理を具備し、二者その別あるも相離るるにあらず、相離れざるもその別なきにあらず、これを哲理の中道とす。」(『井上円了選集』第1巻、35頁)

また、円了はこのことに関連して、別の書物、『仏教活論序論』においては、次のように説いています。

「物心の本体を定むるには、まず非物非心の理体を立つるより外なし。その理体、これを「真如」という。真如は物にして物にあらず、心にして心にあらず、いわゆる非物非心にして、またよく是物是心なり。これを非有非空亦有亦空の「中道」と言う。故に余は、ここに唯理論の名を用うるも、その説敢えて理の一辺に偏するものを云うにあらず。理と物心と相合して、不一不二の関係を有するものを言うなり。

これ余があるいはこれを名づけて、中理論、または完理論と称する所以なり。」(『井上門了選集』第3巻、367頁)

くどいようですが、まったく同じことが、『哲学要領』〔後編〕では次のように説かれています。

「以上の道理に考うるに、理想の本体は物心の外に存すべき理なきをもって、これを物心の中に存すといわざるべからず。しかるときは、理想は相対中の一部分に属すべきか、果たして物心の一部分に属すと定むるときは、その体より物心の開發するゆえん解し難し。もしあるいは相対と絶対と二者全く同一なりとなすときは、二者の性質の異なるゆえん、また解すべからず。いかにこの点を弁明してしかるべきやというに、これヘーゲル氏および仏教中天台家の説によらざるべからず。今その説によるに、相対と絶対との間に範囲の大小を分かつたず、同体不二と立つるなり。すなわち相対も絶対もその体同一にして、心も物も、象も体も、みな一境中にありて存するをいう。しかして物心体象の別あるは、無差別中に差別を現ずるによる。なお一体の物に表裏の別あるがごとし。これをここに物心同体論と称す。物心同体とは、ただに物と心との二元同体のみならず、体と象との二元同体なるをいう。」(『井上門了選集』第1巻、204-205頁)

こうして、物・心と本体(理想、真如)、相対と絶対は、まったく一つの現象にあって、しかもそれが物質的現象であれ心理的現象であれ、その一つの現象の中に、物・心、それら現象とその本体とが見出されるというのです。この立場は、現実世界の一つ一つに絶対なるもの、真実なるものを見出すもので、けっして抽象的・観念的にとどまらない、生命感にあふれたきわめて力強い立場に立つことになります。

このように、西洋哲学の立場ではヘーゲルの絶対と相対とが不二であるとの立場に帰着し、しかもそれは天台の立場に同等との理解に立っています。これが、あの、前に引用した『仏教活論序論』に「今、仏教に立つるところのものはこの両対不離説にして、ヘーゲル氏の立つるところと少しも異なることなし」(第3巻、305頁)とあったことの内実でしょう。この西洋哲学と仏教との関係をもう少し詳しく見ると、『哲学要領』〔前編〕に次の説があります。

「余おもえらく、仏教は一半は理学または哲学にして、一半は宗教なり。すなわち小乗俱舎は理学なり、大乘中、唯識、華嚴、天台等は哲学なり。また曰く、聖道門は哲学にして、浄土門は宗教なり。　　（小乗俱舎＝唯物論に相当と論じる。）

つぎに大乘唯識の森羅の諸法、唯識所変と立つるは西洋哲学中の唯心論に似たり。その第八識すなわち阿頼耶識はカント氏の自覚心、またはフィヒテ氏の絶対主観に類す。つぎに般若の諸法皆空を論ずるは西洋哲学中、物心二者を空ずる虚無学派に似たり。つぎに天台の真如縁起は、西洋哲学中の論理学派すなわち理想学派に似たり。その宗立つるところの万法是真如、真如是万法というは、ヘーゲル氏の現象は無象、無象是現象と論ずるところに同じ。起信論の一心より二門の分かるるゆえんは、シェリング氏の絶対より相対の分かるる論に等し。そのいわゆる真如はスピノザ氏の本質、シェリング氏の絶対、ヘーゲル氏の理想に類するなり。」（『井上円了選集』第1巻、103-104頁）

このように井上円了は、天台家の思想を真如縁起説と見ているのです。天台宗の教理を真如縁起説というべきかどうか、また真如縁起とはどのようなことをいうものなのか、当時の仏教学者の説なども参照しながらもう少し詳しい検討も必要だと思われませんが、その天台宗の代表的な思想に、「一色一香無非中道」（一色一香、中道に非ざる無し。『摩訶止観』）があります。これは、現実の事物の中に絶対を見る思想で、相対と絶対の二元論を完全に克服した立場と言えます。逆に言えば、ヘーゲルの哲学的立場も、これに等しいと見ていたということになるでしょう。確かに「現象は無象、無象是現象」であれば、そのように見ることも十分可能になります。仏教の真如とは、法性（諸法の本性）であり、それは空性でもあって、けっして有なるものではありません。ヘーゲルの理想（本体）についても、ここに無象とありますが、それは空性に通じるものと円了は理解していただろうと私は推察いたします。そうでなければ、現象（相対）の外の実体的存在として本体（絶対）を見ることになってしまうでしょう。

なお、この立場を「現象即実在」論と言いたいところですが、実は、針生清人は、この言葉について、『井上円了選集』第1巻の「解説」において、次のように語っています。

「「現象即実在」という語は円了にあっては、ただ、一カ所『哲学新案』（151頁）において用いられている。それは必ずしも肯定的な使い方ではなく、諸説諸論は一

方に偏するのが常であり、「現象即実在」を肯定すれば、実在は現象の外にありとの反論が生ずるといい、一つの意見に立つのではなく、物心両界を統一するものを主張する筋道において用いられている。円了はその意味では、両界を統一する本体（一如、如元、真元）を追究するのであって、「現象即実在論」を主張するものではなく、かえってそれを超えようとしていたといい得るが、円了の考えの根底にはそれがあつたと思われる。」（針生清人「解説」、422-423頁）

やや分りにくい解説ですが、円了の言葉としては現象即実在論の言葉は使われていないといってよく、たとえば物心同体論、二元同体論、というような言葉が使われるのですが、その同体論の意味内容については、一一の物・心の現象に絶対を見ることがあること、および同体の言葉に含まれる関係性は不一不二の関係であること、その不一不二の関係にあるのは、物と心のみでなく、物・心の現象と本体との関係等をも含むものであること、には留意しておくべきでしょう。

4. 井上円了の哲学Ⅲ 重々無尽の哲学

以上の基本的な立場をふまえ、かなり後、明治42年（1909）12月の『哲学新案』においては、この相対と絶対との関係等について、さらに掘り下げた議論がなされています。たとえば、次の説明があります。

「物如と心如との一体相含なるの理は、物界の根底に万象万化を統一するものあり。心界の基址に万想万感を統一するものあるのみならず、物心両界の深底にも、両界を統一するものありて、物心の一致調和を見るの事実にも明らかなり。その本体をなんと名付くべきや。余はこれを一如、また如元、または真元といわんとす。その一如の体に万象、万感を具備し懐抱し、兼帯し包含して物心両界を開現すると共に、万象、万感が一如真元を具備し懐抱し、兼帯し包含して、重々無尽なる以上は、一物一分子一元素中にも、一如真元を包有し、一心一想中にも、一如真元を含蔵し、これまた重々無尽なり。」（『井上円了選集』第1巻、354頁）

さらに次のようにもあります。

「前述のごとく両端呼応し、両極反響する有様は、対鏡の互いに相映ずるに比して可なり。ここに二個の鏡面ありて、互いに対向するとき、甲鏡の中に乙鏡を含むを見、これと同時に乙鏡の中に甲鏡を含むを見る。かくしてその相映写すること重々無尽なり。吾人の思想の反応、象如の相含も、これと同じく重々無尽なり。ひとり心象中にこの無尽の相を浮かぶるのみならず、物象中にも無尽の相を具す。鏡面の方は二個異体の相含なれども、宇宙の本体たる一如の方は、一体両象にして、その間に重々無尽の関係を有す。その状態は到底吾人が心頭に写し出すことあたわざれば、これを宇宙真相中の妙中の妙、玄中の玄、玄妙の蔵と名付くるより外なし。……」
(『井上円了選集』第1巻、355頁)

これらの文章の内容は、それこそ玄妙にして理解しがたいものですが、これは、一事物（一物でも一心でもよい）の中に、自他の物象、物体、自他の心象、心体、物心同源の真如等々が具備されていて、一事物はあくまでもそれ自身ですがそこに具備されている内容には実に重々無尽の関係があることを見るものです。ここまで来ると、やはり華嚴で一入一切・一切入一、一即一切・一切即一の事事無礙法界を説く教理とほとんど同じということになるでしょう。この立場の内実はまさに華嚴思想そのものです。実際、すでに『仏教活論序論』においても、究極の中道を説く説として天台と華嚴とを挙げていますし、さらに「故に仏教には芥子納須弥、須弥納芥子の語あり。華嚴宗に談ずるところの事々無礙の法門、またこの理に基づく。その法門とは一塵一毛もその体真如より現ざるをもって、おのおのその中に真如の理を具すると唱うるものをいう。これによりて宇宙間の事物互いに相融通して、更にその間に隔歴するところなきを知るに足る。その他、仏教中に十界互具の義ありて、十界中におのおの他の九界を具するゆえんまた推知すべし」（『井上円了選集』第3巻、373頁）ともあります。なお、『奮闘哲学』には、「天台宗は一心の、うちに世界を融合し、真如の体と万法と、同体不離を唱うれど、一事一物一塵の、うちに一切万法の、融通無礙を開示せぬ、しかるに華嚴はこの無礙を立つるにおいて異なれり」（『井上円了選集』第2巻、273頁）とありますので、事事無礙まで説くのは華嚴の独擅場であることを認識はしていたことが分かります。

しかもこの一事物は、時間的存在でもあります。けっして静止的（スタティック）な実体ではなく、まさに現象として刻々推移していくものでしょう。ここで円了は、ただに動的というのみならず、あるいは進化し、あるいは退化し、しかもこのこと

を繰り返して、いわば「循化」し「輪化」するものだと言います。まず、『哲学要領』〔後編〕の説、ついで『哲学新案』の説です。

「かつそれ進化と溶化とは相対にして、一を欠いて他のあるべき理なし。たとえまた進化作用ひとり存するも、その変化理想の範囲の外に出づることあたわざるをもって、進化の極必ずその始めに帰せざるべからず。故に進化もその極点に達すればまた溶化し、溶化もその極点に達すればまた進化し、互いに相循化してやまざるなり。これによりてこれを見れば、循化の規則は理想の性質もとよりしかるところにして、二元一体の原理より派生する理法なり。故に二元一体なれば循化作用なからざるべからず。循化作用あれば二元一体ならざるべからず。これ余が循化作用をもって二元一体の規則とし、二元一体をもって循化作用の原因とするゆえんなり。」（『井上円了選集』第1巻、211頁）

「縦観の所見はここに至りて大略述べ尽くしたり。さればその要点を再約するに、宇宙の真相を世界の古今にわたりて縦観しきたり、現界の前後に無数の世界ありて、進化退化、開発閉合を反復し、無始より無終まで、無限の輪化を継続するを知り、過現来三界、輪化無窮というに外ならざるなり。もしまた一界紀間の大進化大退化の間に、無数の小進化小退化あり、社会の盛衰、吾人の死生、草木の榮枯、山河の成壊等の一進一退あり。また一草一木を組成せる細胞にも、一进一退ありて、輪回反覆窮り無きを知らば、輪化中に輪化ありて、重々無尽なるを見るべし。これを輪化無窮、重々無尽といわんのみ。これ縦観の真相なり。」（『井上円了選集』第1巻、313頁）

このように、宇宙には無限に循化・輪化してやまないものがあり、一事物にはその全体との関係が具備されることになります。これは、一事物に、時間的に過去・未来そして現在との重々無尽の関係を見るものです。一方、すでに見たように、一事物は空間的にも他のあらゆる事物と重々無尽の関係にあるのでした。こうして一事物は、無限に拡がる空間的・時間的に重重無尽の関係を具備したもののなのであり、物心同体論の究極は、次のような立場に極まります。

「縦観にありて重々無尽の輪化あるを知り、横観および内観にきたりて重々無尽の

相含あるを見る、これ実に縦横にわたれる重々無尽なり。もし理性の無限眼をもつてうかがわば、時方両系を一心の所現と体達しきたるべし。しかるときは無限大は一針孔中にはいるべく、無限劫は一電光間に縮むべく、重々無尽の輪化も一瞬一息と化し去るべし。ここにおいて最大の極と最小の極との一致を見、最長の極と最短の極との合体を知る。更にこの理を推して、一分子一元素は、宇宙世界の胎内に収蔵せらるると同時に、宇宙世界は一分子一元素の囊底に包括せらるるがごとき相含あるを知るべきなり。……

かくのごとく想見しきたらば、重々無尽の輪化と重々無尽の相含との更に相含せるを悟了すべし。一心は開きて無限の時方をあらわし、一念は動きて無限の輪化を営むと同時に、無限の輪化は一念中に帰し、無限の時方は一心中に入る。これ宇宙の真相中の真相にして、玄妙の上に更に玄妙を重ねたるものというべし。（『哲学新案』、『井上円了選集』第1巻、355-356頁）

この辺はもはや、ヘーゲルをも超えて宇宙の真相を究明しているといえるのではないのでしょうか。しかしその背景には、天台さらには華嚴の仏教思想が大いに関わっていたことを思わずにはいられません。なお、『奮闘哲学』においては、

「かく説ききたりて最後に循化説と相含説との関係いかんを尋ぬるに、縦中に横を含み、横中に縦を含む道理にて、循化説中に相含説を含み、相含説中に循化説を含むことになる。そかしてその相含がまた循化することになり、循化にして相含、相含にして循化と答えざるを得ぬ。これが宇宙の真理なりというのが、余が天地の活書を読んで得たる哲学である。」（『井上円了選集』第2巻、253頁）

とあって、今の『哲学新案』の説を踏襲しています。さらに、「そこで余の自得の宇宙観を一括するに、前に述べたる循化説と相含説との二者である」（『井上円了選集』第2巻、251頁）ともありますから、円了の哲学は結局、相含説と循化説（輪化説）に帰着すると言えるでしょう。

5. 井上円了の哲学IV 活動主義の哲学

というわけで、井上円了は物的・心的現象の一つ一つについて对象的・固体的に

捉えられるべきものではなく、活動態であると見ていたと言えますが、このことをふまえてのことなのでしょう。円了は結局、人間としてひたすら活動することこそが、哲学のもっとも究極の立場だと見きわめています。それはいわば、「活動主義」とでも呼ぶべき立場です。これまで、ややむずかしい理論の展開を見てきましたが、私はむしろこのシンプルな「活動主義」が円了の哲学の核心であると思っています。このことについて、『奮闘哲学』において、次のように説いています。

「見よ鳥は飛び魚は泳ぎ、水は流れ雲は動くではないか。これみな無字の経、不文の教えではないか。これを一括していわば、物みな活動しているではないか。しかば吾人もまた活動すべきが当然である。しかして活動はなんによって起こるかというに、宇宙の内部に潜在する大勢力の発動である。この勢力によって世界が循環するに至る。しかしてその勢力の至純なるものが吾人の精神内に伝わり、わが生来固有せる先天の良心となりて、われに命令を与うるに至る。故に外に万物の活動を見、内に良心の命令に聴かば、人生の目的おのずから判明し、己の力のあらん限りを尽くして、向上活動すべきものなるを自覚するに至る。」(『井上円了選集』第2巻、255-256頁)

これは、『易』に、「天行健やかなり、君子、以て、自彊（じきょう）して息（や）まず」とある句を、わかりやすく解説したものでしょう。禅の世界にもまた、「一日作さざれば、一日食らわず」（百丈）という言葉があり、その心はただ孜々としてはたらくのみ、というものでしょう。この活動主義の根底にも、東洋的世界観があるといってよいと思います。西田幾多郎の『善の研究』の「純粹経験」も、自発自展する活動態であり、円了の活動主義と西田の活動主義とはどこかで通じていたのかもしれない。

こうして、円了は『奮闘哲学』に次のように説くのです。

「余は従来、古今東西の哲学者の諸論もその大要だけ一通り研究し、その帰するところ人生の目的は活動に外ならぬと自得し、哲学の目的も人生を向上するに外ならぬと知りぬ。爾来、活動主義をとりて、今日に至るものである。

活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり。

これが余の主義である。すなわち吾人の天職はこの活動によりて、人生を向上せ

しむるにありと自信している。しかしてその向上は一身より始めて一国に及ぼし、一国より世界に及ぼすをもって順序を得たるものとし、何人も国家のために尽瘁せよと唱えている。」(『井上円了選集』第2巻、442-443頁)

この「活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり」の言葉こそ、『奮闘哲学』の書名の由来であるに違いありません。

興味深いことに、哲学におけるこの活動主義を、円了は法然の「一枚起請文」(法然が最晩年に、浄土教には学問は要らない、ただ称名念仏すればよいと説く短い文章)になぞらえて、次のように述べています。

「和漢西洋のもろもろの学者たちの沙汰し申さるる哲学の学にもあらず、また学問により諸家の書を読み尽くして唱うる哲学にもあらず。ただ忠君愛国のために奮闘努力すれば、疑いなく人生の本務を尽くしうると心得て活動するほかには、別に子細候わず。ただし宇宙観、人生観などと申すことの候は、みな決定して奮闘努力すれば人生の本務を尽くしうる内にこもり候なり。このほかに奥深きことを存ぜば、かえって哲学の本旨にはずれ、人生の目的にも違うべし。哲学を行わん人は、たとい古今の哲学をことごとく学ばずとも、一文不知の愚鈍の身になり、田夫野人の無智のともがらに交わり、学者の振る舞いをせずして、ただ一向に活動すべし。」(『奮闘哲学』、『井上円了選集』第2巻、282-283頁)

ここの「忠君愛国」の語は、現代においては、「地球社会」に換えて読むのがよいと思います。ともあれ、「決定して奮闘努力す」ること以外、奥深いことは何もないと、明瞭に示しています。円了は万卷の書を読んだとあって差し支えないほどですが、しかもその上でこの単純明快な立場に徹底し得たことは、私には感動的ですからあります。

さて、ひたすら活動するとして、ではいったい何をめざして活動すべきなのかといえば、今も「忠君愛国のため」とあったように、むしろ今日では「地球社会の公正な発展のため」ということと解すべきでしょう。けっして自分の金儲けのためでもなく、名声を得るためでもありません。いわば、他者のためにひたすら働くべきなのです。円了において、このことはきわめて明確です。

その例証として、円了は『奮闘哲学』において、哲学には「向上門」と「向下門」

とがあると説いています。次のようです。

「哲学は物心相対の境遇より絶対の真実に論及する学とするは、哲学の向上門である。この向上門の外に更に絶対の域より相対界へ論下する一道があるが、これを仮に向下門と名付けておく。すなわち哲学の応用の方面である。もとより宗教にも向下門あれど、哲学とややその趣を異にしている。もし哲学に向上のみありて、向下なきときは、ただ学者が己の知欲を満たすまでの学となり、世道人心の上になんら益するところなきに至り、畢竟無用の長物たるを免れぬ。よって哲学には必ず向上向下の二門を併置しておかねばならぬ。すなわち向上門は哲学の理論に属する方面にして、向下門は実際に属する方面である。故にこれを理論門、実際門としてもよい。」（『井上円了選集』第2巻、231頁）

哲学の向上門は、相対より絶対へであり、理論門（理論）です。一方、向下門は、絶対より相対へであり、実際門（応用）です。真理を探究する道が向上門、真理を応用する道が向下門で、この向下門がなければ、哲学もある研究者の自己満足にとどまり、それでは意味がないというのです。

さらに、この「向上門」と「向下門」の関係について、円了はここで次のように示しています。

「……単に哲学そのものよりいえば、向上がその特性とするところにして、これに重きを置くべきものであろうも、もし更に進んでその向上はなんのためかと問わば、向下せんためなりと答えざるを得ない。すなわち向下せんための向上にして、向上門は方便、向下門は目的となるであろう。」（『井上円了選集』第2巻、235頁）

私は、この「向上は向下せんため」「向下せんための向上」という言葉は、非常に深いものがあると思っています。向下門が目的なのであり、向上門はそれを実現するための手だて（方便）だという認識は、実に卓越したものだと思わずにはいられません。

この向上門・向下門は、大乘仏教における「上求菩提、下化衆生」（上に菩提〈悟り〉を求め、下に衆生を[教]化す）、あるいは円了出身の真宗における「往相」（この娑婆世界から極楽浄土に往く）と「還相」（極楽浄土からこの娑婆世界に還る）にも

相当すると思われます。この立場からいえば、たとえば浄土教において浄土往生を求めるのは、この娑婆世界に戻ってきて人々を救済するためだということです。円了はきっと、自らの出身の真宗の極意はここにある、ということでしょう。

こうして見ると、井上円了の根本には、やはり大乘仏教の心が生きていないと思わずにはいられません。すなわち、世のため人のためにはたらいてやまないこと、利他行の実践以外に、人生の意味はないということです。たとえば、円了はこの精神を、「実語教」になぞらえて、次のように言っています。

「山はその高きをもって貴しとせず、植林の用有るをもって貴しとなす。

川はその大なるをもって貴しとせず、灌漑の用有るをもって貴しとなす。

学はその深きをもって貴しとせず、利民の用有るをもって貴しとなす。

識はその博きをもって貴しとせず、濟世の用有るをもって貴しとなす。」

(『奮闘哲学』、『井上円了選集』第2巻、217頁)

このように、学問を修めることは、他者や社会のためでなければ、意味がないと明言しているのです。哲学というものの大切さをひとえに強調した円了が、いかに現実社会での活動を重視したかが知られるでしょう。

6. まとめ

以上、井上円了の哲学について、その概要を紹介しました。もう一度、その要点をまとめますと、次のようになるかと思えます。

1. 哲学を「諸学の基礎」として重視した。
2. ヘーゲルの哲学を評価し、相対と絶対の不二の立場を最高と見た。
3. その立場において、仏教も同等の真理を明かしていると見た。
4. そこから、現象の一一に、時空とも無限に広がる関係性を見出していた。
5. その立場から「活動主義」に出て、そこに哲学の究極を見た。
6. 哲学に向上門と向下門とがなければならないとし、向上は向下するためとした。
7. 現実社会での利民・濟世のためにはたらくことを最重要視した。

円了は西洋哲学をさかんに紹介し、哲学的考察の重要性を訴えましたが、その根底には大乘仏教の精神がしっかりと存在していたのであり、結局、円了の哲学の根本はやはり大乘仏教ではなかったか、というのが現在の私の見解です。

(了)

(竹村牧男・東洋大学文学部教授)